



二人は仲良し?

今年7月で上の子「稜人」は3歳を迎え、妹の「楓」は1歳を迎えます。1歳7か月しか離れていない年子なので、始めは稜人の赤ちゃんがえりが大変でしたが、義母を始め義姉などいろいろな人の支えがあったため、私も頑張って育児ができました。

今では、おもちゃの取り合いや意地悪をするようになり楓を泣かしてしまうこともありますが、楓は稜人のことが大好きです。稜人も優しい一面があり、まだ歩けない楓の手をつないであげたり、結構お兄ちゃんぶりを発揮しています。

この間楓が入院したとき、稜人には大好きな義姉の家にお世話になりいろいろな所に連れて行ってもらったり、帰るとなると「コンビニ行く」とわがママを言っていたみたいだけど、「稜人はおりこうにして待ってて偉かったよ」と優しい言葉をかけてもらいとても安心しました。前は毎日行っていた義姉の家、今は週3日にしています。これからもよろしくをお願いします。

大字中田 遊馬真由美さん 27歳



マイカーデコング わが家は花好き家族

この藤は、亡き父が大切に育てていた盆栽でしたが、長い間に鉢が割れ、地植えにしたところ、甘い香りとともにたくさんの花が咲くよう



になりました。また、いろいろ利用できるハーブ類も育てておりますが、ナススタチウムは冬を2回越しました。霜に当たらないよう早めに家の中に入れてあげただけですが、一本の根で頑張っている姿はうれしいですね。



鴻巣の小倉美知さん

花好きのわが家では、一年中季節の花を眺めていたいという気持ちで、毎年テーマを決めています。今年は「可憐に咲く草花を増やそう」また「実のなる木を育てよう」の二つです。じつは昨年植えたブルーベリーの木に花が咲き、この花が甘い実になるのを期待しています。きれいに咲く花々や樹木に出会えたことを、感謝せねばと思います。

KOGA 万華鏡

家族のいる場所

テーマ展 身近なひとびと 出品作品より

花柄の夏服を着た少女がひとり、所在ない様子で椅子にもたれています。ほおづえをついた少女のどこか淋しげな風情は、多感な時期にある子供の普遍的な姿を表しているようでもあります。

ここに紹介したのは、古河出身の日本画家・樋田洋子氏の、当時9歳になる次女をモデルに描いた作品です。樋田洋子氏は昭和16年(1941)

古河市生まれ。東京芸術大学で日本画を学び、在学中の昭和40年(1965)に第50回院展に初入選します。翌年に同大学を首席で卒業、卒業制作が買い上げとなりました。



樋田洋子「AYAKO」(紙本着色)

に對比する腕や脚の強くない輪郭線、そして色面を意識した空間表現などからは、造形的な試みとしての作画意図が感じられます。古代遺跡や樹木などを主題に、精緻な写実に基づく、鋭敏で幻想的な画風を創り出した樋田氏ですが、この時期、画家の私的な環境を象徴する我が子を媒体に、新しい造形世界を模索していたことがうかがえます。

本作品は昭和56年(1981)第66回院展に出品されました。樋田氏はこの後数年間、少女をモチーフにした作品を続けて発表し、人物画に創作の新たな境地をひらきました。これらの作品は、母と娘の信頼関係を表すとともに、日々生活をともにする家族という存在が、画家にとっての創造力を喚起するモチーフであったことを物語っています。

また、同大学院日本画科在籍中の昭和42年(1967)に第22回春の院展に入選、日本美術院院友に推挙されるなど、早くからその才能を発揮しています。

我が子の肖像でもある人物像のデフォルメされた形態、ちぎった紙によるコラージュのような線と、それ

(街角美術館テーマ展「身近なひとびと」は6月27日まで)

古河街角美術館学芸員 倉井直子